早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書（Web 公開用）

申請者（ふりがな）	遠藤　凌佑（　えんどう　りょうすけ　）
所属・資格（※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載）	早稲田大学人間科学部健康福祉科学科 4 年
発表年月 または事業開催年月	2022 年　　6 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	第 63 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会
発表者（※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること）	遠藤凌佑、金智慧、平田修三、高村柚奈、菊池翔大、越沼愛美、櫻田昂樹、田中翔大、原田光汰、藤井豪、五井野龍了、富塚悠吏、鵜沼はな、小島隆矢、増田和高、桂川泰典、熊野宏昭、日高友郎、扇原淳、辻内琢也
発表題目（※学会発表の場合のみ記載）	福島原発事故 10 年の経験から学ぶ −当時小学生だった若者の語りから＜第 2 報＞−

発表の概要と成果（抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。）

震災・原発事故以降、当時の子供たちの声が表出されず、埋もれてきた。また、時間の経過とともに原発事故問題について語りづらくなっている状況がある。そうした現状を踏まえ、震災当時小学生だった被災当事者はどのように生き抜いてきたのかその語りに注目する必要があると考える。

そこで、本研究は福島原発事故当時小学生だった被災当事者の方々が経験した、避難に伴う悩みや葛藤について明らかにし、被災当事者間における心理状態の違いを比較するとともに、彼らの震災・原発事故の経験を活かした包摂社会を作っていくために、非当事者たちがどう向き合うべきかについて考察する。

調査方法として、福島県双葉町出身の鵜沼さんと福島県郡山市出身の富塚さんにインタビュー調査を実施し、それぞれの語りから避難状況や環境変化の違いについて比較を行った。

調査の結果として、同じ「避難者」でも異なる避難状況と避難による環境変化の捉え方の違いが存在していることが分かった。富塚さんの場合は自主避難であり、生活基盤を整えることができた反面、他の避難者に比べて自分の被害が少ないことへの後ろめたさがあったと考えられる。鵜沼さんの場合は強制避難であり、各地を転々と移動することは負担が大きかったと想像できる。また、避難先の学校でいじめを受けていたことから、「大人に助けてもらいたかった」思いを強く持っていることが分かった。

しかし、このように 2 人の避難の実態や心情は異なるが、他の人のために支援したい、発信したいという思いは共通して持っていると考えられた。すなわち、同じ「避難者」でもそれぞれが自分自身にしかできない取り組みを行っていると考えられる。

震災・原発事故を経験していない非当事者としては、避難者の「多様性」を認識する事が必要である。そして、避難者それぞれがもつ体験の違い配慮しながら全員が社会に参画できる包摂社会を作っていくことが重要である。このことから、被災当事者が語れる場を設けることは大きな意義があると考えられる。本研究プロジェクトは、被災当事者が語れる場を作り、さらに被災当事者と非当事者の出会いの場をつくることにつながったといえるだろう。